

連携で共創する地域循環圏めざして
個別リサイクル法見直しに向けたマルチステークホルダー会議
ロンドンオリンピックの環境配慮と食品調達、リサイクルについて
議事録

日時：2014年10月31日（金） 13：00～14：45

場所：プラザエフ 4F シャトレ

出席者：9名（敬称略）

◇中央官庁（オブザーバー参加）

長野麻子（農林水産省食品産業環境対策室長）

大竹 敦（環境省廃棄物・リサイクル対策部リサイクル推進室室長補佐）

◇自治体

古澤康夫（東京都環境局 資源循環推進部 計画課 課長補佐）

◇メーカー

高田宗彦（サントリービジネスエキスパート(株) SCM 本部）

岩井宏之（サントリービジネスエキスパート(株) SCM 本部）

◇リサイクル事業者

亀井浩一（新日鐵住金株式会社技術総括部 資源化推進室）

◇団体

麴谷和也（グリーン購入ネットワーク 専務理事）

◇消費者

鬼沢良子（NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット事務局長）

■コーディネーター

崎田裕子（NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）

プログラム

1. 前回会合「各主体からの提言」の振り返り
2. 各種リサイクル法見直しとロンドンオリンピックの環境配慮に関する EU 視察報告
3. 各ステークホルダーからのご発言
4. 会場交え、意見交換
5. 省庁ご担当者からのコメント

1. 前回会合「各主体からの提言」の振り返り

崎田より、前回会合の内容、および、今回会合の趣旨が紹介された。

- ・ 前回会合の後、NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネットのメンバー3名で、EU 各国を視察した。本日は、まずその報告をし、それに基づいた意見交換をしたい。
 - 2020年のオリンピックの開催都市が東京に決定した。東京オリンピックは、持続可能な社会、循環型社会の形成にとって非常に重要な機会と捉え、ロンドンオリンピックの環境配慮も視察項目に加えた。

2. 各種リサイクル法見直しとロンドンオリンピックの環境配慮に関する EU 視察報告

崎田より、ロンドンオリンピックの環境配慮に関する EU 視察の報告がなされた。（詳細は、別添資料参照）その後、質疑応答がなされた。主な意見を以下に示す。

Q.国（イギリス）、市（ロンドン市）、実行委員会など、各主体がどのように連携したのかを教えてください。日本の場合、東京が主体になり、国がバックアップすることになると思うが、他の46道府県は何もしないのか、国民に意識を持たせるためにはどうすればよいか、などの課題があるだろう。（麴谷氏）

A.今までのオリンピックは、「国はお金も出すけど口も出す」という形だったが、ロンドン五輪は、IOC から LOCOG にオリンピックの運営権限が委譲され、イギリス政府は距離を置いて見守る、という姿勢だったようだ。

⇒日本政府は縦割りのきらいがあるが、オリンピックはオールジャパンで取り組むべきだ。そのための体制（権限移譲の方法、サポート体制等）をあと6年で作らなければならない。特に、「おもてなし」をどう見える化するか、が重要であると考えます。（麴谷氏）

Q.オレンジのごみ箱にはコンポスト可能なごみを入れる、という話だったが、プラスチック容器もコンポスト可能だったのか？（会場から）

A.コンポスト可能かどうかの事前チェックを受けているという話だった。

⇒コンポスト化すると、ごみの量は減るが、メタンが発生する（温室効果ガス）。東京五輪でコンポスト化をするならば、メタン回収システムも検討すべきだ。（会場から）

⇒オリンピックは、開催期間中より準備期間のほうがごみの量が多い（3分の2が準備期間、6分の1が開催期間、6分の1が終了後に発生する）。それをいかに減らすかは大きな課題だ。（鬼沢）

Q.緑のごみ箱は「リサイクルできる資源」という話だったが、一言で「リサイクルできる」といっても、様々な種類があると思うが、どうなっていたのか？ また、リサイクルで

きる資源、できない資源の区別はどのように判断していたのか？（高田氏）

A. 緑のごみ箱では、瓶、缶、ペットボトルなどを一緒に集めていた。その後、ソーティングセンターで分類する（詳細は第3部で報告したい）。日本ほどごみを細かく分別している国は他にはない。→オリンピックにどう活かすか。

ロンドンでは、大会会場以外の場所でもごみ箱を同じ色分けにした、という話だった。現実には、微妙に色合いが違ったり、分別が不十分だったり、課題も見られた。

ロンドン五輪は、ロンドン市の2030年目標（埋め立てごみゼロ）とはほぼ同じ目標を達成したと言える。

⇒事実関係の訂正：ロンドン五輪の目標値は、リユース、コンポスト、リサイクルを合わせて70%。実際は60%だったので、目標達成はできなかった。（古澤氏）

Q. コンポスト化すると、液肥・堆肥以外に土が発生する。その土は有効活用できるのか？トータルでのバランスを考える必要があるのではないか？（会場から）

A. ロンドン五輪の場合は、コンポスト化施設を新設せず、近隣の既存施設を利用した（新設しても、五輪終了後の使用のあてがないため）。そこでできたコンポストはケント州で利用したと聞いた。（鬼沢）

Q. ロンドン五輪では、建物の環境影響評価制度（LEED等）を用いていたか？（麴谷氏）

A. （視察中は廃棄物のことに注力して、建物のことはあまり聞けなかったが、）5つの専門チームがあったので、建物についてももしっかり取り組んでいたのではないか。

⇒イギリス版のLEEDがあるはずだ。（会場から）

Q. 2020年の時点で再生可能エネルギーをどう使うか、を考えていく必要がある。ロンドンの状況はどうだったか？（聖火をバイオ燃料にすることはできなかった、という話だったが、その背景など）（麴谷氏）

A. 廃棄物の40%はエネルギーリカバリーに用いられていた。現在、高効率のエネルギーリカバリーシステムを日本の企業が提案している、という話だった。日本においては、エネルギー、熱回収の効率を高めることが重要だと考える。

Q. カーボンフットプリントについては、発生したCO₂の見える化をするだけでなく、どう減らしていくか、を考えることが重要だ。ロンドン五輪において、参考になるような取り組みはあったか？（麴谷氏）

A. ロンドン五輪では、できるだけ調達距離を短くするため、近隣の建材を使って建物を作り、解体した後も近隣で使う、という取り組みをしていた。

Q. 宿泊施設に関する取り組みはあったのか？（エコホテル）（麴谷氏）

A. 今後調べたい。

⇒東京五輪の際には、日本のホテルは当然エコホテルだ、というアピールができれば。(麴谷氏)

Q. 東京オリンピックにおいては、関係者だけではなく、市民も連携・協働で取り組んでいくべきだと考えている。そのために、市民に ISO20121 の意味合いなどを伝えていきたいと考えている。ロンドンではその辺りの取り組みはどうだったか？(会場から)

A. ロンドン視察中、「研修」という言葉をよく聞いた。サステナビリティチームは 30 人で、彼らがまず中心的な人たちに研修を行う→研修を受けた人が自分の組織に帰って周りに教える、という形で、20 万人のスタッフに対する研修を行った。伝えるべきことをシンプルに伝えるための教材開発が重要だ、と話していた。研修の方法については、ホームページに公開しているとのこと。

成功の要件として挙げられた要素は以下の通り：全てのステークホルダーを巻き込んで会話すること。そのことが文書に書かれていること。その期間中に働いている人に、高いレベルのトレーニングをすること。

ロンドンオリンピックにおける 7 万人のボランティアスタッフは一般市民だった。東京オリンピックでも、数万人規模のボランティアを教育し、そのボランティアが周りの人に伝えていく、という形は可能なのではないか。ロンドンでも、オーガニック商品を扱う店舗が増えるなど、教育の効果が定着している様子が見られた。

●その他コメントなど

- ・ FSC 認証について、リオ五輪では、サプライヤー向けの研修が進んで、協力関係が構築できていると聞いている。東京五輪でも、そういった関係が構築できればと思う。(会場から)
- ・ ロンドン五輪の「インクルージョン (誰でも歓迎します)」の例：駅構内に色つきのテープが貼られていて、「□□の会場は○○色のテープです」というガイドになっている。現在も、エアポート行き、というテープが貼られていて、それをたどって空港にたどり着けた。また、車いすの方も歓迎するために、チケットの窓口を低くする、などの取り組みもあった。(鬼沢)
- ・ さまざまな取り組みが紹介されたが、重要なことは説明責任だ(やったことを実証すること)。ISO20121 の中にも「モニタリング」の項目がある。第三者認証(フェアトレード等)もその方法のひとつと言えるだろう。(会場から)
⇒ロンドンオリンピックの報告書は、最初は 10 項目ほどあったが、項目が多すぎて伝えたいことが伝わらないのではないかという懸念から、項目を絞った、という話を聞いた。(鬼沢)
- ・ (上記に関連して) 大会期間中には、認証ラベルのない商品もたくさん購入することに

なるだろう。それらの商品に環境配慮がされているのかどうかをいかに確認するか、という議論もすべきではないか。(会場から)

3. 各ステークホルダーからのご発言

4. 会場交え、意見交換

各ステークホルダーから、EU 視察の感想や、今後を見据えた意見などが出された。

- ・ 包材を扱っている立場として、東京のイメージアップにつながるような取り組みをしていきたい。(岩井氏)
- ・ 東京五輪では、ごみ関係で何か目玉になるような取り組みができれば、と考えている。(高田氏)
- ・ 東京オリンピックを成功させるためには、専門チーム(窓口)を作ること、適切なシステムの構築、関係者への研修が求められる。世界に何を伝えたいのか、を明確にして取り組んでいくべきだ。(麴谷氏)
- ・ 日本独自のプラスチック製容器包装のリサイクル手法として、ケミカルリサイクルがある。水できれいに洗浄しなくても少し汚れていてもリサイクルできるというのは、オリンピックのようなイベントでのリサイクルにおいて強みになるだろう。(亀井氏)
- ・ 都としては、施設の建築で手いっぱいになりがちだが、エネルギー面の検討も進んでいる。オリンピックを通じて、持続可能な社会の姿を、目に見える形で(レガシーとして)共有できればと考えている。(古澤氏)

5. 省庁ご担当者からのコメント

大竹氏

- ・ オリンピックは3Rに対する市民1人1人の意識を変える好機と考えている。再生材利用への抵抗軽減、「もったいない」の精神の喚起などを呼びかけていき、それがオリンピックのレガシーとなればと考えている。

長野氏

- ・ 縦割りを排し、政府全体でオリンピックに備えるよう、現在省庁横断の対策室ができている。
- ・ 農水省としては、木材の活用、日本食のアピール、国産の畳や花の活用などに取り組んでいく予定。ロンドンオリンピックで配慮された持続可能な食料調達という観点も忘れないようにしたい。
- ・ 食品ロス削減が重要な課題だと認識している。消費者の立場からもぜひ声をあげていただきたい。

以上